

【全国高等学校長協会賞】

白い月と緑のりんご

神奈川県 聖セシリア女子高等学校 二年

海老塚 恵

「りんごについて、日本人はどんな色を連想するだろうか」
父から薦められた本の一節である。

日本人なら誰でも、りんごというと赤色を連想するだろう。ところが、フランスではりんごといえば決まって緑色を連想するのだという。そしてさらに驚いたことに、フランスで赤い果物として思い起こすのは、さくらんぼなのだそうだ。他の国も例に挙げている。ドイツでも、りんごを赤と捉えるのが一般的だが、英語圏では人により赤と緑、両方の捉え方があるのである。

りんごの持つイメージ一つをとっても、このように国と国との間にある感覚の違いは驚くほど大きい。私はその違いを生んだ言葉の背景に興味をもち、またその言葉そのものを追求していく言語学というものにも興味を覚えた。

そもそも、言語学とはどのような学問なのであろうか。百科辞典によると、言語学とは人類が使用する言語の本質や構造を

科学的に記述する学問である。物理学者が物体がなぜどのように落下するのかを考えるように、言語学者は言語がなぜどのように話されるのかを考えていく。そして人間の言語の特性・構造・機能・系統・変化などを探求していく学問なのである。

この夏ある大学のオープンキャンパスで、言語学の公開授業を聞く機会を得た。マッキヤグ・ピーター教授の“Language, Thought, and Understanding”という授業である。一貫して授業は英語で行われたため、細かい所は理解できなかったが、Metaphor・隠喩、つまりある物を別の物に例える語法を例に出して、英語と日本語の持つ感覚の違いを伝えようとしていた。私が「言語学」というものに初めて出会い、興味を持つきっかけとなったのはこの公開授業であったが、こんな折、父が私に薦めてくれたのが言語社会学者である鈴木孝夫氏の『日本語と外国語』という本だった。鈴木氏は同書の中で国による感覚の違いについて、太陽と月を題材にしてとりあげていたので、触れてみたい。

日本で太陽の色を問えば、当然赤という答えが返ってくる。これは日本のシンボルともいえる国旗の日の丸が最もよくその答えの意味を表している。しかし、ヨーロッパ諸国で太陽の色を問えば、黄色というのが当然の答えなのである。では、日本で黄色い天体というと何がイメージされるか。それは月である。一方、ヨーロッパでは月はどの絵本や図鑑にも白で描かれてい

るというから驚きである。

「一つの国の文化というものは、このように一度それと分かってしまえば何でもないことに、当人が自覚していない極く小さな暗黙の社会的なとりきめやきまりが無数に含まれている」

この無意識の部分が、文化の根ともいべき基盤を形成していて、その食い違いが思わぬ問題を引き起こしている。特に全く同じと思われるものの価値が正反対である時、予想外の事件を起こすようだ。

日本の大手食品会社があるアラブの国に、缶詰を輸出した時のことである。内容も価格も他社より優っているのに売れ行きが悪いため、原因を調査した所、原因はパッケージの太陽のマークにあった。日本では好んで太陽や日の丸が商品名に使われている。しかし、一年中砂漠の中で灼熱の太陽に苦しめられて生活するという環境にある人々にとって、太陽とは日本人が考えるような恵みを与える生命の源ではなく、最悪の場合死を意味する呪わしい存在なのだ。では、アラブの人々が好む天体とは何かといえば、それは月なのである。太陽が沈み夜になると、砂漠は突然涼しくなり人々は生氣を取り戻す。「月こそ美であり救いであり希望だ」という月の美学は、こうして生まれたのである。だからこそ、アラブ文化に基盤をもつイスラム文明の中で月、特に三日月が尊ばれ、しかもイスラム教を重要な宗教とする国々の中で三日月が国旗の中に多くとりいれられている

理由はここにあったのである。

外国人と交流するために必要なことは、共通の言葉を持つことである。「このような国際相互交流を目的とする言語学者の最も重要な狙いは、相手を知り、自分を相手に分らせるという相互の人間関係であろう」と筆者は語る。お互いの理解のために言語を学び、言語を使う。この本は言語学習の真の目的が人間理解であることを教えてくれた。将来が外国語を学びたいと思っている私にとってこの本は大切な出会いとなった。新たな切り口から国際理解の魅力を教えてくれ、語学学習の一番大切な根底となるものを伝えてくれた一冊である。

体験書籍

『日本語と外国語』鈴木孝夫著